致知創刊35周年記念企画

創業の原点

vol.❶

愚直に、まめに、コツコツと

株式会社
日本財託
❖
代表取締役
重吉 勉

倒産と背中合わせの創業期

当社の歴史は、バブル崩壊の歴史とともにスタートしました。

東京二十三区で不動産管理会社を営む当社が、現在九十八パーという極めて高水準の入居率を実現し、景気に左右されない盤石の財務基盤を確立できたのは、倒産と背中合わせであった創業期、強い危機感をもとに愚直に努力を積み重ねてきた結果と自認しています。

経営者になり成功することを夢見て上京した私は、たまたま縁あって不動産会社に就職しました。当時はバブルの真っ最中で、不動産に投資すれば必ず儲かるという幻想に日本中が踊らされ、会社の先輩方も一攫千金を夢見て次々と独立していきました。私もそうした先輩方の姿に憧れ、六人の部下を率いて平成二年十月、二十七歳で日本財託を設立したのです。

バブルが弾けたのはその直後でした。それまで不動産会社に際限なく融資を続けていた銀行は一斉に手を引き、あれほど羽振りのよかった先輩方も次々と会社を破綻させ、姿を消していきました。

当社も引き渡しの決まっていた物件が白紙解約となり、資本金二千万円のうち手付金の放棄等でいきなり千四百万円もの金を失い、その年の暮れには早くも資金が底を突いてしまったのです。

初心を忘れず愚直に歩み続ける

年末最後の出勤日、倒産の恐怖や社員への申し訳ない気持ち等々が心を渦巻いて布団から出られなくなり、私は一人部屋に籠もって涙を流していました。お昼頃玄関のチャイムが鳴るのでドアを開けると、私を心配して駆けつけてくれた六人の社員が立っていました。

「元気を出してください」

「皆で頑張りましょう」

彼らの励ましに私は奮起しました。失敗したからといって命まで取られるわけではない。ならば死ぬ気になってやり直そう――。

バブル崩壊後も生き残った不動産会社は、いずれも不動産売買のみに依存せず、建物のメンテナンスや入居者対応等の管理業務を請け負い、薄利ではあっても堅実に継続収入を得ていました。当社はここに生き筋を見出し、愚直に管理号数を増やし、十年がかりで利益の出る体質を創り上げました。

いま思えば、会社を絶対潰してはならないという強い危機感だけが原動力でした。人脈も財力もなかった当時は、とにかく他人様から愛され、力を貸していただける存在になろうと考え、出会いを求めて様々な場に顔を出し、お手紙や情報提供等、とにかく先方に喜んでいただけることを愚直に、まめに、コツコツと積み重ねて懸命にご縁を育んできました。

この初心を忘れないためにも、私は会社のロゴに豆をあしらい、愚直にコツコツ、まめまめしく、笑顔と感謝ということを社員共々心に刻み続けています。

当社はこの創業の精神から今後も決して離れることなく、東京二十三区で最も信頼される不動産管理会社を目指してまいります。

――取材・執筆／致知出版社